

(社)東洋音楽学会西日本支部 支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第46号(2003年4月7日)

定例研究会のご案内

第213回定例研究会

とき 2003年4月19日(土) 13:00~

ところ 国立民族学博物館 第3セミナー室(次ページ参照)

2002年度卒業論文・修士論文発表(13:00~14:00)

1. 星村倫子(京都教育大学)

卒業論文「奄美諸島における民謡教育の実践例とその考察」

2. 桑原瑞来(大阪音楽大学)

修士論文「創作和太鼓 - 関西における現状の分析 - 」

研究発表(14:15~15:00)

福岡正太(国立民族学博物館)

「民俗音楽から民族音楽へ - 小泉文夫の民族音楽学の展開 - 」

展示見学(15:00~)

国立民族学博物館特別展「マンダラ展」(自由見学)

第214回定例研究会

とき 2003年6月14日(土) 14:00~

ところ 国立民族学博物館 第3セミナー室(次ページ参照)

2002年度卒業論文・修士論文発表(14:00~17:00)

1. 田辺菜美子(相愛大学)

卒業論文「ブ - タンの音楽における近代化の様相と伝統の保持」

2. 松木彩美(京都教育大学)

卒業論文「列車の接近・発車時における音楽型サイン音の実態」

3. 川端美都子(大阪大学)

修士論文「アルベルト・ヒナステラの作品におけるパンパの表象」

4. 前田けい子(大阪大学)

修士論文「学校教育における日本の伝統音楽の新しい位置」

5. 松村美穂(神戸大学)

修士論文「阿波踊の囃子における笛の役割に関する研究」

国立民族学博物館交通案内

- ・ 阪急茨木市駅・JR 茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで日本庭園前下車徒歩 15 分
 - ・ 大阪モノレールで万博記念公園駅下車、自然文化園を通過して徒歩 15 分（自然文化園の入園料 250 円が必要になります）
 - ・ 大阪モノレールで公園東口駅下車徒歩 13 分
- 第 3 セミナー室は 2 階にあります。入館料は必要ありません。国立民族学博物館の詳細等は、「みんぱくウェブサイト」(<http://www.minpaku.ac.jp/>) をご参照ください。

第 212 回定例研究会報告

シンポジウム「表演芸術における映像記録化」

報告 福岡正太

東洋音楽学会西日本支部第 212 回定例研究会は、2 月 8 日大阪大学シグマホールにて、標記のタイトルの下、大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」、大阪芸術大学芸術研究所および「ベトナム少数民族無形文化遺産調査・映像記録化および人材養成プロジェクト」日本委員会との共催で行われた。現在進行中の「ベトナム少数民族無形文化遺産調査・映像記録化および人材養成プロジェクト」(略称 RVMV: Research and Video Documentation of Minorities' Intangible Cultural Heritage in Vietnam) について、映像記録化を中心的にとりあげながら紹介する内容だった。まず、山口修さん(大阪大学)が RVMV プロジェクトへの参加機関等について紹介し全体像を示したあと、中島貞夫さん(大阪芸術大学)がこのプロジェクトにおける映像記録化の基本的考え方を示した。休憩をはさんで、月溪恒子さん(大阪芸術大学)がこのプロジェクトの歴史、目的、方法、範囲について概説し、最後に藤岡幹嗣さん(大阪芸術大学)が、実際にこのプロジェクトで作成した映像を示しながら、中島さんが示した考え方にのっとった映像記録化の実際について具体的に論じた。

まず、山口さんと月溪さんの概説に基づき、私が理解した範囲で RVMV プロジェクトについてまとめておこう。このプロジェクトはもともと、1994 年にベトナム政府とユネスコが開催した「ベトナム少数民族の無形文化遺産を保護育成するための国際専門家会議」に端を発している。この会議には、日本から山口さんと徳丸吉彦さんが出席し、ベトナム雅楽の復興および少数民族の芸能の調査記録という 2 つのプロジェクトを提案した。まず前者のプロジェクトを徳丸さんがリーダーとなって実行し、すでに一定の成果を上げている。それに引き続き山口さんがリーダーとなって立ち上げたのがこの RVMV プロジェクトである。このプロジェクトは、国際交流基金アジアセンターの助成を受けて始まり、山口さんとともに計画当初から指導的役割を果たした故高橋光則さんの要請で大阪芸術大学芸術研究所も参画、そして、昨秋文部科学省・日本学術振興会により選定された大阪大学の 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」の中にも位置づけられることになった。ベトナム側のカウンターパートとしてベトナム国立民族学博物館が参加している。

このプロジェクトの核となっているのが 3 年間連続で開催予定のワークショップである。すでに 2001 年度、2002 年度の 2 回実施された。これは前期座学、フィールド

ワークそして後期座学をセットにしたもので、組織的に調査および映像記録作成の方法を磨くことを目的としている。フィールドワークは、学術班3班と映像班に分かれて行い、年度ごとに異なる地域・民族を対象として行う。将来的には、それぞれの芸能をになう人々自身が調査および記録をおこなえるようにすることを目指しているという。

次に、今回のシンポジウムの中心となった「映像記録化」の問題について、中島さんと藤岡さんの発表にそって報告しよう。「映像の記録性 vs 表現性 人文学にたいする映像学からの貢献」と題された中島さんの発表は、映像作成における「記録性」と「表現性」を対比させ、人文学に貢献するための「記録性」に徹した映像を強調する内容だった。映画監督として長いキャリアをもつ中島さんによれば、映画はその初期において何かを記録するということから出発したが、ハリウッド映画に象徴されるように次第に独自の表現の技法を開発し「表現性」を追い求めるようになった。人文学に貢献するための映像は、極力こうした「表現性」を排除し、記録という機能に徹する必要があるということ強く主張した。まず、この表現性が映像にどう表れるかを示すために、映画『893愚連隊』と『木枯らし紋次郎 関わりござんせん』の一部をビデオで上映した。『893愚連隊』は、京都駅でチンピラが白タクの客引きをしている場面から始まる。この撮影は、実際に京都駅で極力カメラが目につかないようにして撮影したもので、俳優とその演技はともかく、映像は作為的な「表現」をあまりともなっていない。それに対して『木枯らし紋次郎』の方は、多くの部分をセットの中で撮影し、作為的な「表現」の上に成り立っている。たとえば、照明を最大限に利用し、登場人物の感情表現の多くも照明の力によっている。映画制作においては、シナリオ、俳優の演技、セット、カメラのレンズやフレーム切り、照明、編集など、様々な段階で何重にも作り手の作為が入る。こうした作為を徹底して排除することを中島さんは主張した。おそらく、長年映画監督として活躍してきた中島さんにとって、こうした映像の作り方は、それまでの経験を根底から否定するようなものだろう。それだけに私には、中島さんの主張はとても説得的だった。しかし、最後の質疑応答でも問題とされたように、多くの人の理解では、あらゆる映像は何らかの「表現」あるいは「作為」をともなっている。この点について中島さんは、映画が、そこにある対象をきっちり撮るといふこととは別の発展をしてきており、「表現性」とはそのことを指すとした。まず、対象についての知識と感性により、その意味や価値をしっかりとらえて撮影することを強調した。

こうした中島さんの考え方に基づく映像が、RVMVにおいてどのように実現されているかということは、藤岡さんの発表によって明らかにされた。藤岡さんは、まず、映像は「空間を共有する被写体の時間的連続を記録することができる」ものであり、形に残らず時間の連続の中に存在するパフォーマンスを記録するのに適しているとした。一方、こうした映像には、時間的および空間的な「表現性」が入り込む余地がある。3回打たれた太鼓の音を2回分しか撮影しないことで生じる誤解は、時間的「表現性」の1例であり、別の場所で撮影した映像をつなぐことであたかも実際とは別の空間で演じているようにみせかけることは、空間的「表現性」の1例である。こうした「表現性」を排除するためには、パフォーマンスを1カットで撮影するという手法をとる必要があるということ藤岡さんは強調した。1カット撮影を実現させるには、必要な録画時間を確保できる機材（長時間撮影が可能なバッテリーを備えたビデオカメラなど）を使用すること、撮影環境を整えること（適切なカメラ位置や録音位置など）そして演者から撮影に十分な情報を得ることが必要である。このようにパフォーマンスの撮影において

は、1カットで撮影し省略をしないこと、基本的に編集はしないことが大切であるのに対して、もの作りの撮影においては、1カット撮影の必要はなく、工程のポイントをしっかりと押さえることが大切だとされた。また、どこで、誰がどのような暮らしをし、どのようなパフォーマンスをしているのかを伝えることをこころがけており、フィールドでの撮影では、風景や人々の暮らしも同時に撮影する必要がある。

このシンポジウムで取り上げられた芸能の映像記録の問題は、私たちにとって身近な問題である。音を記録するばかりでなく、その音が生み出される様子や音と一体となった身体表現を視覚的に記録できるビデオは、もはや私たちの研究と切り離して考えることができない。しかし、その方法論については、まだ十分な議論がされていないように思う。その点で、今回、芸能記録にかかわる映像の専門家の話を聞くことができたのは、大変有益だった。ただし、この問題は映像の専門家だけで方向を定めることはできない。中島さんは、対象についての知識と感性によりその意味と価値を捉えた上で撮影を行う必要を指摘した。どのような目的で、何をどのように撮影するかという判断は、この場合、音楽・芸能研究者に大きくのしかかってくる責任だろう。今回、音楽・芸能研究者の側からこの点についての発言がなかったのは残念だった。また、民族音楽学では、「音楽学的」研究と「人類学的」研究をいかに融合するかということが議論されてきた。映像記録においても、芸態の記録に加えて、「文化の中の」、あるいは「文化としての」音楽・芸能をいかに表象するかということが今後大きな課題となってくるだろう。もちろん、パフォーマンスをしっかりと記録することは不可欠のことであり、RVMV がその点において大きな成果を上げつつあることは間違いがない。さらにこれを「厚い記述」に支えられた映像による音楽・芸能の民族誌に発展させていくためにはどういった方法論が考えられるのか、あるいは両者は別のものであるのかをどう考えるべきなのだろうか。このプロジェクトにかかわる方々がどのような答えを出していくのか注目したい。

研究発表申し込みについて

西日本支部の定例研究会での研究発表申し込みは下記までご連絡ください。

〒570-8555 大阪府守口市藤田町 6-21-57 大阪国際大学人間科学部 藤田研究室
電話 06-6902-0791 ext. 2568、fax 06-6902-8894 (代表)
e-mail tfujita@hus.oiu.ac.jp

入会申し込み・住所変更について

入会ご希望の方は、80 円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。会員の住所等の変更についても本部事務所へお知らせください。

〒110-0001 東京都台東区谷中 5-9-25 第2 八光ハウス 201 号 (社)東洋音楽学会
電話 03-3823-5173、fax 03-3823-5174、e-mail LEN03210@nifty.ne.jp

発行：(社)東洋音楽学会西日本支部 編集担当：福岡正太
〒585-8555 大阪府南河内郡河南町東山 469 大阪芸術大学音楽学科 月溪研究室気付
e-mail: tukitani@osaka-geidai.ac.jp、fax: 0721-93-7914 (月溪気付)
